



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	中学生における英単語綴り困難の背景と支援方法に関する研究(論文要旨)
Author(s)	銘苅,実土
Citation	
Issue Date	2018-03-16
URL	http://hdl.handle.net/2309/149515
Publisher	
Rights	

氏 名 : 銘 莉 実 土
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 307 号
学位授与年月日 : 平成 30 年 3 月 16 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 中学生における英単語綴り困難の背景と支援方法に関する研究

論文審査委員 : (主査) 教授 小池 敏英
(副査) 教授 馬場 哲生 教授 泉 真由子
准教授 山中 冴子 教授 伊藤 友彦

学位論文要旨

現在、小・中学校では、特別な教育的ニーズを把握し、必要な学習支援を行う体制が整えられつつある。本研究では、通常学級に在籍する中学生の学習困難として指摘されている英単語の習得困難について、その背景と支援方法を検討することを目的とした。まず中学生の英単語綴り困難の生起に関する要因と学年進行に伴う変化を明らかにし(検討 1)、要因の対処すべき順序性や各要因が重複することによる影響の変化について検討した(検討 2)。また、英単語綴り困難と漢字書字困難の背景の違いについて検討を行った(検討 3)。加えて、英単語綴り習得の基礎スキルの習得過程と、基礎スキルと単語の綴りの特徴との関係を明らかにした(検討 4)。さらに、検討 1,2,4 で明らかになった基礎スキルの習得過程や、単語の綴りの特徴との関係に基づき、英単語綴り困難を改善する教材と支援手立てについて検討を行い、その効果を確認した(検討 5)。

検討 1 では、英単語綴り困難の生起に関わる背景要因について、学年進行に伴う基礎スキルの習得との関係を、中学生 679 名を対象として検討した。すなわち、1 年生の段階では、小学校の段階で習得したローマ字を手掛かりとした音素の混成スキルに依存して英単語を学習するが、英語学習が進むなかで英単語の視覚的認知スキルや正書法スキルを習得するため、学年進行に伴い、視覚的イメージや正書法知識を利用したより効率的な方略に移行することが示唆された。これより基礎スキルは英単語の学習方略となるため、方略として用いるスキルの低成績に伴い英単語綴り困難が生起することを指摘した。

検討 2 では、基礎スキルにおける、英単語綴り困難の生起に与える影響の順序性や、重複することの影響について、中学生 1429 名を対象として明らかにした。結果、全学年共通してローマ字テスト成績が第一の要因となること、各テストの低成績が重複することで英単語綴り困難の生起に与える影響が強まること、学年を追うごとにその影響が深刻になることが示された。また、ローマ字テスト成績に次ぐ要因が学年で異なることから、基礎スキルが音素の混成スキル、視覚的認知スキル、正書法スキルの順に習得されることが示唆された。以上の結果より、英単語綴り困難を改善する支援を実施するにあたっては、各スキルの低成績の

重複を避けること、より早期から介入を行うこと、基礎スキルの習得順序を考慮すべきである可能性が示された。

検討 3 では、中学生 1429 名を対象として英単語綴り困難と漢字書字困難の背景について検討を行った。結果、英単語綴り困難と漢字書字困難について、それぞれが単独で生起する場合と、重複して生起する場合があることを明らかにした。さらに、生起パターンによって異なる要因が関与していること、英単語綴り困難と漢字書字困難が重複して生起することの要因に、継続するローマ字の低成績を指摘した。これより、英語と日本語の読み書き困難の生起パターンからも、支援すべき背景要因を把握できると考えられるため、読み書き支援に際しては、日本語と英語における基本的な読み書きスキルを総合的に評価する必要があることを指摘した。

検討 4 では、中学生 178 名の縦断的検討により、検討 1,2 によって示された基礎スキルの習得順序を検討した。この点については、検討 2 の結果から、音素の混成スキルの習得困難が他のスキル習得を妨げる可能性が示されたため、ローマ字テスト成績の推移に基づく他のスキル習得の過程について検証した。また、英単語綴りについて、単語の綴りの特徴ごとにその背景を検討した。その結果、ローマ字直音表記は視覚的認知スキルと正書法スキル両方の、特殊表記は正書法知識の習得を妨げることが明らかになった。また、直音表記の困難は英単語綴り全般の、特殊表記の困難はアルファベットの文字-音対応規則(GPC ルール)から外れる綴りが含まれている単語(DTD 単語)の綴り困難の生起に関与することが明らかになった。この結果より、基礎スキルの習得順序が明らかとなり、英単語綴り困難を改善する支援としては、先に習得されるべき音素の混成スキルと、アルファベットの文字-音対応の規則を適用することで全体を綴ることのできる単語(GPC 単語)の習得を目指す支援を先に実施すべきことが示唆された。

検討 5 では、中学生 193 名を対象として検討 1、2、4 で示された基礎スキルの習得過程や英単語綴り困難の生起との関連に基づき、RTI モデルに対応する効果的な支援方法について検討を行った。その結果、単語完成課題を通じたアルファベットの GPC ルールの理解に基づく音素の混成スキル及び GPC 単語の習得を促す支援の有効性と、正書法知識及び DTD 単語の習得を促す支援の有効性が示唆された。さらに、ローマ字テストで低成績を示す場合には、DTD 単語の支援を行い正書法スキルの習得がはかられたとしても、DTD 単語の定着は見られないことから、基礎スキルの習得過程を考慮した支援が有効であることが示され、検討 4 を支持する結果が得られた。

以上より、日本人中学生の英単語綴り困難の背景と効果的な支援方法について明らかにした。英単語綴り習得に関わる基礎スキルの習得過程や、それに基づく有効な支援方法について示すことができたことは、今後通常の学校で中学生を対象とした学習支援を構築していくうえで重要な示唆となると考えられる。